Tsukuba Psychological Research
2010, 40, 9-19

楽観性がリスク認知，犯罪不安，防犯行動へ及ぼす影響[1)]

筑波大学大学院人間総合科学研究科　荒井　崇史

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系　吉田富二雄

The effects of optimism on risk perception, anxiety about crime, and crime prevention behaviors

Takashi Arai (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba 305-8572, Japan*)
Fujio Yoshida (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this survey is to examine the effects of optimism on risk perception, anxiety about crime, and crime prevention behaviors among undergraduate students (N = 351). The results indicate that risk perception and anxiety about crime are higher in females than males, although no significant sex differences are observed in optimism levels (i.e., positive thoughts and avoidance of negative thoughts). Furthermore, an analysis of the influence of optimism and mass media indicates the following points. (a) Positive thoughts and the avoidance of negative thoughts decrease risk perception and anxiety about crime in males, but such effects are not found among females. (b) For both males and females, positive thoughts increase expectations of help from others and facilitate crime prevention behaviors. Additionally, avoidance of negative thoughts indirectly reduces crime prevention behaviors by decreasing anxiety about crime only for male students. (c) Finally, mass media increases risk perception and anxiety about crime in males, which in turn facilitates their crime prevention behaviors. For females, however, mass media does not influence their risk perception and anxiety about crime.
Key words: optimism, risk perception, anxiety about crime, crime prevention behaviors, mass media

問　題

2009年に島根，千葉で相次いで女子大学生が殺害され，マス・メディアに大々的に取り上げられた。また近年では，若者の麻薬を巡る問題も後を絶たない。こうした話題性の大きい事件を含めて，若者は他の世代と比較して，犯罪被害の客観的なリスクが高いことが報告されている（内閣府，2009;Fig. 1)。

しかし，犯罪被害の客観的なリスクの高さに相反して，若者は自分が被害に遭う主観的なリスク認知や不安感情が，他の年代よりも低いことが，古くから報告されている（例えば，Clemente & Kleiman, 1976; Ortega & Myles, 1987)。また，特に大学生においては防犯意識が低く，具体的な防犯対策が十分に行われていないことも問題視されている（笹竹，2008)。確かに，犯罪被害に対する不安にかられ，必要以上に対策を講じることは，生活の質を低下させるだけでなく，精神的健康や身体的健康の問題をも引き起こす可能性がある（Stafford, Chandola & Marmot, 2007)。また，20代という活力に溢れる時期に不安にかられて，精神的・物理的に閉じこもることは，現実的ではない。つまり，必要以上に不安を感じることなく，自分の身を守る対策を実施することが必要となる。また，政策実施の側から考える

1)　本研究は，筑波大学人間学類心理学主専攻の成澤知美さんの2009年度卒業論文の一部を再分析した結果に基づいている。ここに記して感謝の意を表します。

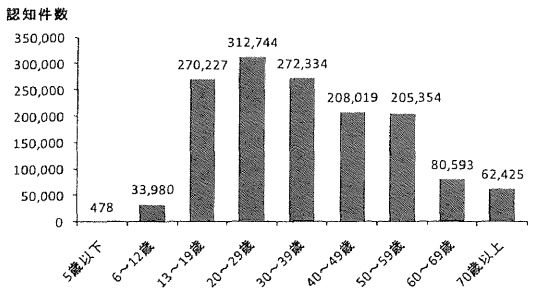

Fig. 1　被害者の年齢別の刑法犯認知件数。内閣府（2009）より作成。交通関係業務上過失致死傷罪を除く。

と，必要以上に不安を喚起させることなく，防犯対策の実施を促すことが肝要となる。これを実現するためには，リスク認知や犯罪不安に影響を及ぼす要因を明らかにし，防犯対策を実施する背景にどのような要因が働いているのかを解明することが一助となると思われる。

若者におけるリスク認知や犯罪不安，そして防犯行動が注目され始めたのは比較的近年である。こうした研究として挙げられるのが，Fisher & Sloan（2003）やWilcox, Jordan & Pritchard（2007）であり，若い女性では性犯罪への恐怖が，他の犯罪に般化するために，全般的な犯罪不安が高まると仮定する「性的暴力の影」仮説（Shadow of Sexual Assault Hypothesis）を実証的に検討している。確かに，こうした研究では，罪種ごとの不安の関係は明らかにできるが，不安を感じる背景，不安と防犯行動の関係については明らかにできていない。先述の通り，若者の防犯行動を促進するためには，リスク認知や犯罪不安が生じる背景や防犯行動が生じる過程を探ることこそ必要と思われる。

こうした点に関連して，マス・メディアへの長期的・反復的な接触が，リスク認知や犯罪不安に影響を及ぼす要因として重要であることが指摘されている（Gunter, 1987）。多くの場合，我々は犯罪に関する情報を，マス・メディアを通して得る。一方，マス・メディアの情報は様々な面で偏っていることも知られている（例えば，Dominick, 1973）。これらの点を踏まえると，マス・メディアから情報を得ることで，リスク認知や犯罪不安，そして防犯行動に何らかの変化が生じるとしても不思議ではない。

マス・メディアとリスク認知や犯罪不安，防犯行動との関連性については，Gerbner & Gross（1976）が培養理論を提出して以降，様々な研究がなされてきた（Heath & Gilbert, 1996）。従来の研究をまとめると，必ずしも一貫した知見は見出されていないものの，少なくともマス・メディアへの長期的・反復的な接触が，リスク認知や犯罪不安に何らかの影響を及ぼしていることは確かであると考えられる。こうしたマス・メディアの影響力は，若者においても示されている。例えばHeath & Petraitis（1987）は，シカゴの大学生を対象とした調査で，テレビの視聴頻度が多いほど，都市における犯罪不安が高まることを明らかにした。ただし，彼女らの研究では，テレビの視聴頻度のみに注目している。近年の若者から考えると，おそらく，テレビと並んでインターネットを通した情報の取得の多さにおいて特徴的であるであろう。その意味では，テレビに留まらず，インターネットをも含めて捉える必要があると思われる。こうした点を踏まえて，本研究では，リスク認知や犯罪不安に影響を及ぼす第一の要因として，インターネットを含めたマス・メディアへの接触を取り上げる。

一方，マス・メディアの情報のような外的要因とは別に，リスク認知や犯罪不安に影響を及ぼす個人の内的要因を指摘することもできる。こうした要因の一つとして挙げられるのが，健康心理学領域で議論されている楽観性（Optimism）である。楽観性には多様な定義が存在するが，代表的な捉え方としてSeligman（1991）は帰属スタイルの観点から楽観性を捉え，Scheier & Carver（1985）は，肯定的な結果を期待する傾向と捉えている。

楽観性の影響に関しては，楽観性が高いほど，抑うつ感や絶望感が低く，身体的な健康状態が良好であることが報告されている（Scheier & Carver, 1985）。また他にも，楽観性が様々な面でポジティブな影響を及ぼすことも指摘されている（Tayler & Brown, 1988）。しかし逆に，楽観的であることが，ネガティブな結果をもたらすことも報告されている。例えば，Dillard, Midboe & Klein（2009）は，6か月ごとの4時点で同一対象者に調査を行い，Time 1時点で飲酒に対して楽観的であるほど，Time 2，3，4時点で，酩酊によって怪我をしたり，物を壊したり，友人と口論になったりなどのネガティブなイベントを経験しやすいことを明らかにしている。

こうした知見を踏まえると，犯罪不安においても，楽観的であることがポジティブな結果を導くばかりでなく，ネガティブな結果を導く可能性が予想される。しかし，楽観性がリスク認知や犯罪不安，防犯行動に及ぼす影響については，これまでに十分な検討がなされていない。Perloff & Fetzer（1986）が，大学生では，見知らぬ他者と比較して，自分は被害に対する脆弱性が低いと判断すると報告しているこ

とから考えると，楽観的であることが，犯罪被害に対する認知や感情，そして行動と関連すると予想しても不思議ではない。

Perloff & Fetzer（1986）の知見から，より具体的に楽観性とリスク認知や犯罪不安との関連性を考えると，まず，物事に対して楽観的に考えるほど，自分のリスクを低く見積もり，不安を感じにくいことが予想される。その結果として，防犯行動が抑制される可能性が考えられる。また，楽観的に考えるほど，抑うつ感や絶望感が低いという知見を踏まえると，逆に楽観的な思考を行うことが積極的な行動につながる可能性も考えられる。すなわち，楽観的であることが積極的な行動を導き，積極的な行動のためにこそ対策を実施しようという意思や行動に結びつく可能性も考えられる。この場合，楽観性はリスク認知や犯罪不安と関連せず，むしろ防犯行動を直接的に促進すると予想される。こうした予測を踏まえて，本研究では，リスク認知や犯罪不安に影響を及ぼす第二の要因として，楽観性を取り上げる。

目　的

以上の議論を踏まえ，本研究では，マス・メディアや楽観性が，大学生のリスク認知や犯罪不安，そして防犯行動にどのような影響を及ぼすのかを検討することを目的とした。また本研究では，これまで多様に定義・測定されてきた楽観性をより包括的に捉えるために，既存の尺度から網羅的に項目を収集し，これらをまとめて捉えることとした。

方　法

調査対象者と手続き

筑波大学の学生に対して，講義時間を利用して質問紙を一斉配布し，その場で，無記名で回収した。また一部の学生については，個別に質問紙を配布し，回答後に無記名で回収した。最終的に，回答に不備のない 351 名（男性 133 名，女性 216 名，不明 2 名；平均 20.21 ± 1.39 歳）を分析対象とした。

調査内容

楽観性　安藤・中西・小平・江崎・原田・川井・小川・崎濱（2000），村田・菊池（2009），中村（2000），沢宮・田上（1997），外山（2005），吉村（2007）による楽観性に関連した各尺度から項目を収集し，内容が重複している項目などを除外して，合計 22 項目を作成した。回答の際には，各項目がどの位自分に当てはまるかについて，「1：全く当てはまらない」から「6：非常に当てはまる」までの 6 段階で評定を求めた。

マス・メディアへの接触　普段の日常生活で，テレビ，新聞，インターネット，ラジオ，雑誌のニュース番組や記事をどの位の頻度で視聴しているかに回答を求めた。回答の際には，各マス・メディアのニュース番組や記事について，「1：全く視聴していない」から「6：非常に頻繁に視聴している」までの 6 段階で評定を求めた。

リスク認知（犯罪に対する認知的反応）　荒井・吉田（2008）に基づき，社会的水準と個人的水準とを区別して項目を作成した。具体的には，社会的水準の認知として「治安悪化認知」3 項目，個人的水準の認知として「被害リスク認知」3 項目を作成した。回答の際には，各項目のようなことをどの程度思うかについて，「1：全くそう思わない」から「6：非常にそう思う」までの 6 段階で評定を求めた。

犯罪不安（犯罪に対する感情的反応）　荒井・吉田（2008）に基づき，社会的水準と個人的水準とを区別して項目を作成した。具体的には，社会的水準の感情として「社会の治安に対する不安」3 項目，個人的水準の感情として「自分が被害に遭う不安」3 項目を作成した。回答の際には，各項目のようにどの程度感じるかに関して，「1：全く感じない」から「6:非常に感じる」までの 6 段階で評定を求めた。

防犯行動（犯罪に対する行動的反応）　自分自身の心掛けと他者との協力に基づく防犯の観点から項目を作成した。ただし，特に実施に負担のかかる防犯行動がどの程度の影響を受けるのかを検討するために，本研究では，他者との協力に基づく防犯行動を用いた。具体的には，「周囲の人との関係を密にするように注意している」，「緊急時に助けを求める連絡が取れるように注意している」，「周囲の人と，居住地で起こった犯罪の情報を共有するように注意している」などの 5 項目を作成した。回答の際には，各項目のようなことにどの程度注意しているかについて，「1：全く注意していない」から「6：非常に注意している」までの 6 段階で評定を求めた。

その他　年齢，性別，同居形態，居住形態，被害経験，被害伝聞経験等に回答を求めた。なお，分析に用いない変数の詳細な説明は割愛した。

調査時期

2009 年 10 月中旬～ 2009 年 11 月中旬

結　果

各変数の基本的検討

(a) 楽観性　楽観性の22項目について，探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行い，複数の因子に.40以上の負荷量を示す項目といずれの因子にも負荷量が.40以下の項目を削除し，再度分析を行った。これを単純構造が得られるまで繰り返し，最終的に，固有値の減衰状況（6.52, 1.54, 1.25, 0.90…），スクリープロット，解釈可能性から判断し3因子を抽出した（Table 1）。

第1因子には，「何か困難な出来事が起きても，切り抜けることができると思う」，「自分は運が強いと思う」などの物事をポジティブに考える傾向を表す項目が高い負荷量を示していた。それゆえに，第1因子を「ポジティブ思考」と命名した。第2因子には，「失敗しても，それにこだわらない」，「良くないことが起こっても，それは一時的なものにすぎない，と思うようにしている」などのネガティブな思考を回避する傾向を表す項目が高い負荷量を示していた。それゆえに，第2因子を「ネガティブ思考回避」と命名した。第3因子には，「周りの人は，自分に親切にしてくれるだろうと考えている」，「困ったことがあったら，きっと誰かが助けてくれると思う」などの他者からの援助を期待する傾向を表す項目が高い負荷量を示していた。それゆえに，第3因子を「援助期待」と命名した。なお各因子の信頼性係数αは，第1因子から順に，.87，.82，.75であった。以降の分析では，各因子とも項目を合計し，項目数で割った値を得点とした。

(b) マス・メディアへの接触頻度　マス・メディアへの接触頻度については，「どちらかと言うと視聴している」，「たびたび視聴している」，「非常に頻繁に視聴している」を併せて，最も多かったのがインターネットで74.6%であった。次いで，テレビで60.7%，新聞で31.1%と視聴頻度が多かったが，雑誌（11.4%）やラジオ（6.6%）では，極端に視聴頻度が少なかった。すなわち，大学生においては，大部分がインターネットやテレビ，そして新聞においてニュースに接していると考えられる。それゆえに本研究では，インターネット，テレビ，新聞の評定値を平均した値を，マス・メディアへの接触頻度とした。なお，テレビと新聞との間には有意な正の相関が見られたものの（$r = .21$，$p < .01$），インターネットとテレビ（$r = .00$，*n.s.*）や新聞（$r = .05$，*n.s.*）との間には，有意な相関は見られなかった。しかし本研究では，マス・メディア間の差異を議論するよりも，全体としてのマス・メディアへの接触量を捉

Table 1　楽観性の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

	*F*1	*F*2	*F*3	h^2	*Mean*	*SD*
ポジティブ思考（α = .87）						
何か困難な出来事が起きても，切り抜けることができると思う	.861	.007	−.093	.660	3.87	1.13
どんな問題にでもそれなりに対処できると思う	.796	−.256	−.033	.394	3.57	1.11
自分は運が強いと思う	.640	.050	−.099	.383	3.59	1.34
将来，私は幸せに暮らせると思う	.559	.042	.242	.582	3.82	1.21
成功するか失敗するか5分5分の事態では，たいてい成功すると思う	.489	.183	.030	.421	3.44	1.15
私には悪いことよりも良いことのほうが起こりやすいと思う	.476	.192	.119	.496	3.36	1.15
たとえそれほど自信がないことでも，結果的に何とかなると思う	.459	.277	−.042	.429	3.76	1.18
この先，楽しいことがきっと待っていると思う	.442	.003	.340	.498	4.05	1.22
ネガティブ思考回避（α = .82）						
失敗しても，それにこだわらない	−.180	.791	.059	.497	2.85	1.22
良くないことが起こっても，それは一時的なものにすぎない，と思うようにしている	−.103	.699	.086	.454	3.61	1.26
何事もあれこれ思い悩まない	−.065	.664	.003	.387	2.82	1.39
何事も「なんとかなるさ」と楽観的に考えるようにしている	.171	.655	−.048	.575	3.83	1.28
悪い結果にならないと楽観的に考えている	.212	.604	−.102	.511	3.72	1.34
援助期待（α = .75）						
周りの人は，自分に親切にしてくれるだろうと考えている	−.021	−.033	.897	.757	3.71	1.13
困ったことがあったら，きっと誰かが助けてくれると思う	.019	−.012	.718	.525	3.42	1.22
人に頼みごとをした時には，必ずきいてもらえると思う	−.111	.077	.537	.262	2.92	1.09
*F*2	.64					
*F*3	.51	.36				

えるために，これらの値を平均して接触頻度とした。

(c) リスク認知・犯罪不安　リスク認知，犯罪不安について，荒井・吉田（2008）に基づいて確認的因子分析を行った（Fig. 2）。リスク認知に関しては，「治安悪化認知」，「被害リスク認知」の潜在変数から，各観測変数へパスを想定した。分析の結果，適合度指標は GFI = .99，AGFI = .94，CFI = .99，RMSEA = .08 であり，十分な値であると判断した。また，各潜在変数から観測変数へのパス係数は，.60 から .94 の範囲で，いずれも有意であった。犯罪不安に関しては，「社会の治安に対する不安」，「自分が被害に遭う不安」の潜在変数から，各観測変数へパスを想定した。分析の結果，適合度指標は GFI = .98，AGFI = .93，CFI = .99，RMSEA = .09 であり，十分な値であると判断した。また，各潜在変数から観測変数へのパス係数は，.48 から .95 の範囲であり，いずれも有意であった。

なお各因子の信頼性係数 α は，治安悪化認知 = .88，被害リスク認知 = .79，社会の治安に対する不安 = .82，自分が被害に遭う不安 = .75 であった。以降の分析では各尺度とも項目を合計し，項目数で割った値を得点とした。

(d) 防犯行動　本研究で新たに作成した，他者との協力に基づく防犯行動の 5 項目の一次元性を確認するために，主成分分析を行った。その結果，第一主成分のみが抽出され，寄与率は 49.00%，信頼性係数 α は .74 であった。それゆえに一次元性が確認されたと判断した。以降の分析では，項目を合計し，項目数で割った値を得点とした。

各変数における性差

楽観性，マス・メディアへの接触，リスク認知，犯罪不安，防犯行動の性差を検討した結果を Table 2 に示した。分析の結果，女性は男性と比較して，治安悪化や自分の被害の可能性を高く考え，治安や自分の被害に強い不安を感じていた。同様に，女性は男性と比較して，他者との協力に基づく対策を多く行っていた。

一方楽観性では，女性は男性と比較して，「困ったことがあったら，誰かが助けてくれる」などの援助期待を強く持っていた。しかし，「困難なことも切り抜けられる」，「自分は運が強い」といったポジティブ思考，「失敗にこだわらない」，「何事も思い悩まない」などのネガティブ思考回避においては有意な性差は見られず，男女ともに中間的な値であった。

総じて，リスク認知や犯罪不安に関しては，全般的に女性の方が高く，女性の方が他者との協力に基づく対策を実施していると言える。しかし，楽観性については，概ね男女間で差が見られず，男女ともに極端に楽観的でも，悲観的でもないと考えられる。

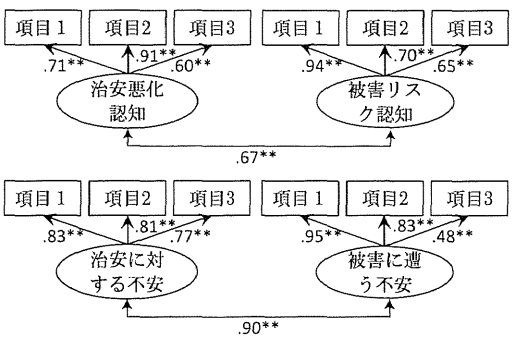

Fig. 2　リスク認知，犯罪不安の確認的因子分析の結果。四角は観測変数を，楕円は潜在変数を意味する。誤差変数の図示は省略し，有意なパスのみを記載した（** p < .01）。

各変数間の関連性

各変数間の相関係数を男女別に算出した（Table 3，4）。その結果，男性ではポジティブ思考，ネガティブ思考回避と，治安悪化認知や被害リスク認知，治安に対する不安との間に有意な負の相関が見られる一方，女性ではそのような関係は見られなかった。むしろ女性では，援助期待と治安悪化認知や，治安に対する不安との間に有意な正の相関があることが明らかになった。つまり，男性では，ポジティブに考え，ネガティブな思考を回避するほど，治安悪化や被害可能性を低く考え，治安への不安が低いと言える。しかし女性では，楽観的であることと犯罪不安の低さとに関連がなく，むしろ治安が悪化していると考え，治安に不安を感じるほど，他者からの援助を期待すると考えられる。

一方，楽観性と防犯行動との関連については，男女ともに，ポジティブ思考や援助期待と，他者との協力に基づく対策との間に有意な正の相関が見られ，女性でのみ，ネガティブ思考回避と他者との協力に基づく対策との間に有意な正の相関が見られた。つまり，犯罪不安やリスク認知とは異なり，男女とも，ポジティブな思考をするほど，あるいは他者からの援助を期待するほど，他者との協力による防犯行動を行っていると言える。特に女性では，ネガティブな思考を回避するほど，他者との協力による対策を多く行っていた。

さらに男女ともに，楽観的であることと，マス・メディアの視聴頻度の間に有意な関連は見られな

Table 2　リスク認知，犯罪不安，防犯行動，楽観性，およびマス・メディアの平均値（*SD*）

	男性 (N = 133)		女性 (N = 216)		t 検定
	平均値	*SD*	平均値	*SD*	
犯罪不安・リスク認知					
治安悪化認知	3.54	1.25	3.96	1.01	**
リスク認知	3.52	1.11	3.88	0.87	**
治安に対する不安	3.41	1.17	4.12	0.94	**
被害に対する不安	3.80	1.01	4.31	0.87	**
防犯行動					
他者との協力による対策	2.93	0.92	3.38	0.94	**
楽観性					
ポジティブ思考	3.64	0.88	3.72	0.83	
ネガティブ思考回避	3.37	0.98	3.37	0.99	
援助期待	3.09	0.99	3.51	0.87	**
マス・メディア					
接触頻度	3.44	1.04	3.61	0.98	

※レンジ　　**$p < .01$

治安悪化認知・リスク認知：「1：全くそう思わない」～「6：非常にそう思う」6件法
治安に対する不安・被害に対する不安：「1：全く感じない」～「6：非常に感じる」6件法
防犯行動：「1：全く注意していない」～「6：非常に注意している」6件法
楽観性：「1：全く当てはまらない」～「6：非常に当てはまる」6件法
マス・メディア：「1：全く視聴していない」～「6：非常に頻繁に視聴している」6件法

かった。一方男性では，マス・メディアへの接触頻度と治安悪化認知，被害リスク認知，治安に対する不安，被害に対する不安との間に有意な正の相関が見られることが明らかとなった。これらの点をまとめると，男女ともにインターネットやテレビで犯罪情報に接することと，楽観的であることには関連がないと言える。また，男性においてのみ，マス・メディアへの接触頻度が多いほど，治安が悪化していると考え，治安に対する不安を強く感じていると考えられる。そして，男性でのみ，マス・メディアへの接触頻度が多いほど，自分の被害可能性を高く見積もり，被害に対して不安を強く感じていると言える。

楽観性，マス・メディアがリスク認知，犯罪不安，防犯行動に及ぼす影響

楽観性やマス・メディアへの接触がリスク認知，犯罪不安，防犯行動に及ぼす影響を検討するために，重回帰分析（変数増減法，α = .05）の繰り返しによるパス解析を行った。基本的な因果の流れとして，第1水準にポジティブ思考，ネガティブ思考回避，マス・メディアへの接触，第2水準にリスク認知，犯罪不安，第3水準に援助期待，第4水準に他者との協力に基づく防犯行動を想定した。なお，楽観性の中でも援助期待は，他者に対する認知傾向であり，リスク認知や犯罪不安に影響を及ぼすと想定するよりも，リスク認知や犯罪不安から影響を受けると想定する方が自然であると考えられる。それゆえ，本研究では援助期待を第3水準とした。男女別に分析を行った結果をFig. 3，4に示した。

男性について見ると，ポジティブな思考をすることがリスク認知の低下をもたらし，ネガティブな思考を回避することで治安悪化認知や治安への不安が減少することが明らかとなった。逆に，マス・メディアへの接触頻度が多いほど，自分が被害に遭うリスクを高く見積もり，治安や自分の被害に対する不安を強く感じると言える。

また，援助期待や他者との協力に基づく対策については，男性では，ポジティブ思考が援助期待を介して，他者との協力に基づく対策を増加させる反面，ネガティブな思考を回避することで，治安への不安が減少し，それが他者との協力に基づく対策の減少へと結び付いていた。そして，マス・メディアに頻繁に接するほど，治安に対する不安を強く感じ，そうした不安が他者との協力による対策の増加に結び付くとともに，マス・メディアへ頻繁に接すること自体が，対策をより多く行うことへと繋がっていた。

一方，女性について見ると，ポジティブ思考やネガティブ思考回避，そしてマス・メディアへの接触と，治安悪化認知，被害リスク認知，治安への不安，そして被害への不安とには関連が見られなかった。

Table 3　リスク認知，犯罪不安，防犯行動，楽観性，およびマス・メディア間の相関係数（男性）

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
犯罪不安・リスク認知									
①治安悪化認知	—								
②被害リスク認知	.59 **	—							
③治安に対する不安	.77 **	.61 **	—						
④被害に対する不安	.58 **	.67 **	.78 **	—					
防犯行動									
⑤他者との協力	.24 **	.18 **	.30 **	.26 **	—				
楽観性									
⑥ポジティブ思考	−.13	−.18 *	−.16	−.09	.21 *	—			
⑦ネガティブ思考回避	−.19 *	−.21 *	−.33 **	−.15	.03	.58 **	—		
⑧援助期待	.02	−.02	.08	.06	.35 **	.37 **	.34 **	—	
マス・メディア									
⑨接触頻度	.18 *	.21 *	.24 **	.29 **	.36 **	.15	−.10	.07	—

$^{**}p < .01$，$^{*}p < .05$

Table 4　リスク認知，犯罪不安，防犯行動，楽観性，およびマス・メディア間の相関係数（女性）

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
犯罪不安・リスク認知									
①治安悪化認知	—								
②被害リスク認知	.42 **	—							
③治安に対する不安	.58 **	.51 **	—						
④被害に対する不安	.39 **	.65 **	.71 **	—					
防犯行動									
⑤他者との協力	.23 **	.16 *	.27 **	.28 **	—				
楽観性									
⑥ポジティブ思考	.13	−.10	.08	.03	.27 **	—			
⑦ネガティブ思考回避	.06	−.10	−.03	−.06	.24 **	.67 **	—		
⑧援助期待	.20 **	.04	.17 *	.12	.27 **	.62 **	.40 **	—	
マス・メディア									
⑨接触頻度	.06	−.01	.06	−.03	.13	.08	.03	.03	—

$^{**}p < .01$，$^{*}p < .05$

つまり，女性は男性とは異なり，特性として楽観的であろうがなかろうが，マス・メディアへの接触頻度が多かろうが少なかろうが，リスク認知や犯罪不安は影響を受けないと考えられる。

また，援助期待や他者との協力による対策について言えば，女性では，物事をポジティブに考えるほど，他者からの援助を期待し，実際に他者との協力に基づいた対策を多く行うと言える。同時に，治安が悪化しているという認識を持つことが他者からの援助期待を強め，自分自身が被害に遭う不安を強く感じることで，他者との協力に基づく対策を多く行うことが示された。

考　察

本研究では，楽観性やマス・メディアへの接触が大学生のリスク認知，犯罪不安，そして防犯行動にどのような影響を及ぼすのかを検討した。以下では，リスク認知・犯罪不安と防犯行動とを切り分けて議論する。

楽観性，マス・メディアとリスク認知・犯罪不安

本研究の結果，女性は男性と比較して，全般的にリスク認知や犯罪不安が高い一方，物事をポジティブに考える傾向（ポジティブ思考）やネガティブな思考を回避する傾向（ネガティブ思考回避）では差

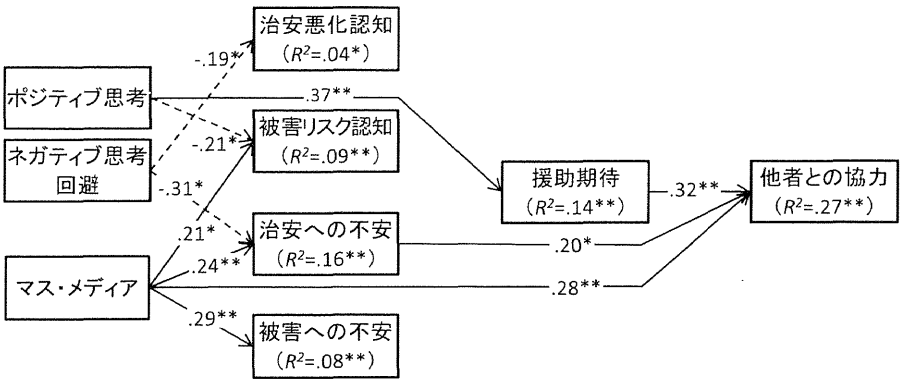

Fig. 3　男性における楽観性，マス・メディアがリスク認知・犯罪不安・防犯行動に及ぼす影響。矢印の数字は，標準偏回帰係数を表す（$^{**}p < .01$，$^{*}p < .05$）。なお，実線は正のパスを，破線は負のパスを表す。

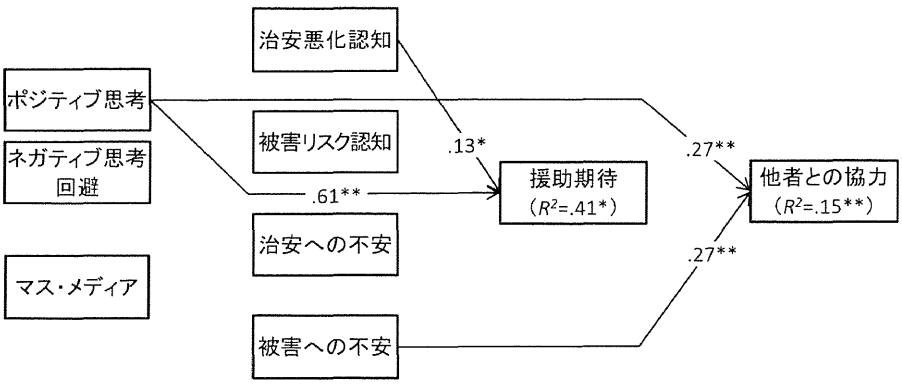

Fig. 4　女性における楽観性，マス・メディアがリスク認知・犯罪不安・防犯行動に及ぼす影響。矢印の数字は，標準偏回帰係数を表す（$^{**}p < .01$，$^{*}p < .05$）。なお，実線は正のパスを表す。

が見られなかった。また，男性では，楽観性がリスク認知や犯罪不安の減少をもたらしていたが，女性では，楽観性はリスク認知や犯罪不安に何ら影響を及ぼしていなかった。

女性は男性と比較して，リスク認知や犯罪不安が高いことは，比較的一貫した知見として報告されている（Ferraro, 1995）。本研究の結果も，これらの先行研究と一致する。女性におけるリスク認知や犯罪不安の高さに対する説明として，女性は犯罪に対する自分の脆弱性（Vulnerability）を高く捉えていることが指摘されている（Warr, 1984）。自分が犯罪に対して脆弱であると捉えるならば，犯罪被害の問題は男性よりも女性において現実的で，切実であろう。このように女性では，犯罪被害の現実性・切実性が高いために，もともと持つリスク認知や犯罪不安が高く，変動しにくい可能性が考えられる。こうした予測を支持する結果として，男性では，マス・メディアへの接触がリスク認知や犯罪不安を増大させる一方，女性では，マス・メディアへの接触はリスク認知や犯罪不安に何ら影響を及ぼしていなかった。つまり，男性では現実性や切実性が低いため，リスク認知や犯罪不安が外的な要因の影響を受けやすいが，女性では被害の現実性や切実性が高いために，外的な情報を受け取っても，リスク認知や犯罪不安が変動しなかった可能性が推察される。

総じて，女性においては，自分の脆弱性を高く認知するがゆえに，被害の現実性や切実性が高く，そうした要因がリスク認知や犯罪不安を全体的に押し上げているために，楽観性やマス・メディアへの接触などの要因の影響を受けにくいと考えられる。

楽観性，マス・メディアと防犯行動

防犯行動に注目すると，男性では，ポジティブ思考が援助期待を介して，防犯行動を増加させる一方，

ネガティブな思考を回避することが治安に対する不安を低減し，それが防犯行動の減少をもたらしていた。女性では，ポジティブ思考が援助期待を高めるとともに，直接的に防犯行動を増加させていた。しかし，男性に見られるようなネガティブな思考の回避が防犯対策の減少をもたらすことは，女性では見られなかった。

こうした知見を踏まえると，必ずしも，一般的に言われるように，物事を楽観的に考えているために，何も対策を行わないわけではないと言える。逆に，物事をポジティブに考えるような積極性が多様な活動に対する意欲をもたらし，意欲的に他者と関わり活動するためにこそ，最低限度の防犯行動を行うと予想される。実際，Alloy & Ahrens（1987）は，楽観性が抑うつの低さと関連することを報告しているが，こうした知見は，楽観性と積極性との関連を示すひとつの傍証となると思われる。

ただし，男性において，ネガティブな思考を回避することが治安に対する不安を低減し，それが防犯行動の減少をもたらしていた点には注目する必要がある。つまり，楽観性が一概に防犯行動を促進するわけではないと考えられるためである。Goodman, Chesney & Tipton（1995）は，楽観性の高い者ほど，HIV に関する健康増進教育やスクリーニングサービスを受けないことを指摘している。こうした知見は，犯罪という文脈でも共通なのであろう。失敗にこだわらない，あるいは何事も思い悩まないような，ネガティブなことを気に掛けない者は，治安悪化に不安を感じないであろう。そして，治安悪化に不安を感じないからこそ，防犯行動に注意しないと考えられる。

いずれにしても，楽観性は，防犯行動に対して促進的な影響を持つとともに，抑制的な影響を持つという，相反する可能性を秘めていると言える。そして，楽観性が防犯行動に対して促進的な影響を及ぼすのか，抑制的な影響を及ぼすのかは，物事をポジティブに考えるポジティブ思考なのか，ネガティブな思考を回避するネガティブ思考回避かによって異なる。

次に，マス・メディアへの接触に注目すると，男性では，マス・メディアへの接触頻度の多さが治安への不安を増大し，他者との協力による対策を増加させるのと同時に，マス・メディアへの接触自体が，防犯行動の実施をもたらしていた。しかし女性では，マス・メディアへの接触はリスク認知や犯罪不安だけでなく，防犯行動にも影響を及ぼしていなかった。むしろ，女性では治安悪化の認知や自分が被害に遭う不安が，援助期待や実際の他者との防犯対策を導いていた。

こうした結果から考えると，男性ではマス・メディアから情報を得る機会が多くなることで，犯罪不安が高まり，それが防犯行動に結び付くが，女性ではマス・メディアから情報を得る頻度は，リスク認知や犯罪不安，そして防犯行動に何ら影響を及ぼさないと言える。先の議論の通り，女性は犯罪被害に対する現実性や切実性を高く認識しているがゆえに，不安が他の要因によって変動しにくいと予想される。そうであるからこそ，楽観性やマス・メディアへの接触とは関係なく，治安悪化認知が援助期待を強め，自分が被害に遭う不安が他者との協力による防犯対策の増加をもたらすと考えられる。

女性のリスク認知や犯罪不安について，さらに考えると，女性ではマス・メディアへの接触頻度よりも，身近な情報によってリスク認知や犯罪不安が変化する可能性が指摘できる。つまり，より身近で起こった犯罪や事件の情報こそが，女性の被害に対する現実性や切実性をもたらすことが予想されるためである。実際，Tyler（1980）や Skogan & Maxfield（1981）は，自分の被害経験や近隣住民との犯罪や事件に関する会話が，自分の被害に対する不安を高めること，そして自分の被害に対する不安が防犯行動をもたらす可能性を示唆している。つまり，女性では，現実性や切実性の高い身近な情報が，リスク認知や犯罪不安を高めるがゆえに，他の要因によって，リスク認知や犯罪不安が変動しにくくなり，防犯行動にも影響が生じなかった可能性が考えられる。

今後の展望

本研究では，特性としての楽観性を取り上げたが，楽観性とは別に，リスク認知研究では，我々が楽観バイアス（Optimistic Biases）という認知バイアスを持つことが指摘されている（Weinstein, 1989）。そして，楽観バイアスは，災害や健康問題などの様々な問題において生じることも指摘されている（Weinstein, 1989）。こうした点を踏まえると，特性としての楽観性とは別に，認知バイアスとして，犯罪被害に対する楽観バイアスの影響力を検討することが必要であると考えられる。

また本研究の結果を見ると，全体的に，決定係数が低かったと言える。こうした説明力の低さは，リスク認知や犯罪不安への影響要因を検討した多くの研究において見られるにもかかわらず，これまでに問題として提起されていない。従来の研究への反省を含め，リスク認知や犯罪不安，そして防犯行動に

より大きな影響を及ぼす要因を一つ一つ検討する必要があると思われる。このような検討を積み重ねることで，必要な対策を奨励する際の実効力のある指針が得られると考えられる。

引用文献

Alloy, L.B. & Ahrens, A.H. (1987). Depression and pessimism for the future: Biased use of statistically relevant information in predictions for self versus others. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 366-378.

荒井崇史・吉田富二雄（2008）．犯罪被害に対する認知・感情と防犯対策―防犯対策を行うのは，社会に対する不安が原因か？自分が被害に遭う不安が原因か？　日本心理学会第72回大会発表論文集，417.

安藤史高・中西良文・小平英志・江崎真理・原田一郎・川井加奈子・小川一美・崎濱秀行（2000）．多面的楽観性尺度の作成　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要，**47**，237-245.

Clemente, F. & Kleiman, M. (1976). Fear of crime among the aged. *Gerontologist*, **16**, 207-210.

Dillard, A.J., Midboe, A.M. & Klein, W.M.P. (2009). The dark side of optimism: Unrealistic optimism about problems with alcohol predicts subsequent negative event experiences. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **34**, 1540-1550.

Dominick, J.R. (1973). Crime and law enforcement on prime-time television. *Public Opinion Quarterly*, **37**, 241-250.

Ferraro, K.F. (1995). *Fear of crime: Interpreting victimization risk*. New York: State University of New York Press.

Fisher, B.S. & Sloan, J.J. III. (2003). Unraveling the fear of victimization among college women: Is the "shadow of sexual assault hypothesis" supported? *Justice Quarterly*, **20**, 633-659.

Gerbner, G. & Gross, L. (1976). Living with television: The violence profile. *Journal of Communication*, **26**, 172-194.

Goodman, E., Chesney, M.A. & Tipton, A.C. (1995). Relationship of optimism, knowledge, attitudes, and beliefs to use of HIV antibody testing by at-risk female adolescents. *Psychosomatic Medicine*, **57**, 541-546.

Gunter, B. (1987). *Television and the fear of crime*. London: John Libbey.

Heath, L. & Gilbert, K. (1996). Mass media and fear of crime. *American Behavioral Scientist*, **39**, 379-386.

Heath, L. & Petraitis, J. (1987). Television viewing and fear of crime: Where is the mean world? *Basic and Applied Social Psychology*, **8**, 97-123.

村田英代・菊池勝也（2009）．防衛的悲観主義者における認知的方略の認識の検討　愛知教育大学研究報告，**58**，97-105.

内閣府（2009）．平成21年版　犯罪被害者白書（PDF形式）2009年5月18日 <http://www8.cao.go.jp/hanzai/whitepaper/w-2009/pdf/zenbun/index.html>（2010年3月10日）

中村陽吉（編著）（2000）．対面場面における心理的個人差―測定対象についての分類を中心にして　ブレーン出版

Ortega, S.T. & Myles, J.L. (1987). Race and gender effects on fear of crime: An interactive model with age. *Criminology*, **25**, 133-152.

Perloff, L.S. & Fetzer, B.K. (1986). Self-other judgments and perceived vulnerability to victimization. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 502-510.

笹竹英穂（2008）．女子大生の犯罪情報への関心および防犯意識の形成について―リスク認知および犯罪不安の観点から―　犯罪心理学研究，**46**，15-29.

沢宮容子・田上不二夫（1997）．楽観的帰属様式尺度の作成　教育心理学研究，**45**，355-362.

Scheier, M.F. & Carver, C.S. (1985). Optimism, coping, and health: Assessment and implications of generalized outcome expectancies on health. *Health Psychology*, **4**, 219-247.

Seligman, M.E.P. (1991). *Learned optimism*. New York: A.A. Knopf.

Skogan, W.G. & Maxfield, M.G. (1981). *Coping with crime: Individual and neighborhood reactions*. California: SAGA publication.

Stafford, M., Chandola, T. & Marmot, M. (2007). Association between fear of crime and mental health and physical functioning. *American Journal of Public Health*, **97**, 2076-2081.

外山美樹（2005）．認知的方略の違いがテスト対処方略と学業成績の関係に及ぼす影響―防衛的悲観主義と方略的楽観主義―　教育心理学研究，**53**，220-229.

Taylor, S.E. & Brown, J.D. (1988). Illusion and well-being: A social psychological perspective on

mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 193-210.

Tyler, T.R. (1980). Impact of directly and indirectly experienced events: The origin of crime-related judgments and behaviors. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 13-28.

Warr, M. (1984). Fear of victimization: Why are women and the elderly more afraid? *Social Science Quarterly*, **65**, 681-702.

Weinstein, N.D. (1989). Optimistic biases about personal risk. *Science*, **246**, 1232-1233.

Wilcox, P., Jordan, C.E. & Pritchard, A.J. (2007). A multidimensional examination of campus safety: Victimization, perceptions of danger, worry about crime, and precautionary behavior among college women in the post-clery era. *Crime & Delinquency*, **53**, 219-254.

吉村典子（2007）．楽観性が健康に及ぼす影響―リスクテイキング行動，生活習慣，楽観的認知バイアス，健康状態との関連から―　甲南女子大学研究紀要　人間科学編，**43**，9-18.

（受稿 3 月 23 日：受理 4 月 30 日）